

小澤英浩教授退官によせて



退官にあたって

長い間お世話になりました

口腔解剖学第一講座 小澤英浩

2月15日、いよいよ最終講義の日を迎えてしまいました。最終講義の演壇に立った時には、万感胸に迫るものがありました。学生諸君の顔を眺めながら、講義・実習・運動会・歯学祭・浜コンなど学生諸君とのさまざまな交流が走馬燈のように脳裏を駆けめぐりました。

「骨代謝の形態科学」と題する最終講義を行いました。講義の終わりに私の好きな言葉、Imagination, Serendipity, Beauty is truth そして William Beck の Science is fun!などを学生諸君への饞の言葉として送りました。

40年にわたる大学生活、特に新潟大学歯学部での昭和42年から今日に至る34年間の教育・研究者としての生活は、掛け替えのないものであり、私に素晴らしい人生と感動を与えてくれました。新潟大学、教職員の皆様、そして誰よりも学生諸君に心から感謝いたします。勿論、日々私と共に教育・研究の苦楽を共にした家族同様の口腔解剖学第一講座の多くの皆様にはただただ感謝するのみであります。

私は、昭和35年東京医科歯科大学歯学部を卒業し、弘前大学医学部解剖学教室に10ヶ月ほど席をおいた後、主任教授、水平敏知先生とともに昭和36年新潟大学医学部第三解剖学講座へ赴任したのが新潟大学との関係の始まりでした。しかし、2年後には、水平教授の東京医科歯科大学医学部への転勤が決まり、私も再度お供する形で母校、東京医科歯科大学へと転勤いたしました。東京医科

歯科大学へ戻って5年後、新潟大学に歯学部が新設されることとなり、新しい歯学部の助教授として採用され、再度懐かしい新潟の地で教育・研究に当たることになったのは昭和42年のことです。新潟大学における医学部での最初の2年間に、現荒川学長を始め多数の先生方と研究を通して知り合い、その方々の多くがまだ医学部に在籍されておられたことも、再度の新潟への赴任を決定づけました。私は赴任後間もなくアメリカへ留学致しましたが、学園紛争で帰国を余儀なくされ、1969年の暮れに帰国し東大安田講堂の炎上を知り愕然としたことを記憶しております。帰国後まもなく、旧医学部校舎を使用できるようになり、本格的に研究を開始致しました。昭和48年、念願の新校舎が医学部グラウンドに建てられた年の1月から、私は口腔解剖第一講座を担当することになり、電子顕微鏡をはじめとする諸設備もほぼ完備した新しい研究室で、講座運営をスタートすることができたのは幸いでした。昭和56年、学生定員増に伴い、新研究棟が増築され、私どもの講座は再度移転し、現在に至っております。

およそ10年間の医学部時代は電子顕微鏡学の黎明期であり、細胞の微細形態を中心とした細胞・分子生物学的研究を幅広く行っていました。歯学部へ移ってから今日に至るまでの30余年にわたる私の研究テーマは、歯や骨など、歯学の中心テーマである「硬組織」に関する微細形態学的研究で、生物学的石灰化現象、エナメル質や象牙質など歯

の硬組織形成機構、そして骨代謝あるいは骨改造現象の微細形態学的解析でありました。私どもの研究室の目標はただ一つ、質的にも量的にも世界一の硬組織形態学研究を常に新潟から発信し続けることであり、研究室のメンバーは日々その思いと誇りを胸に秘めて今日まで努力を重ねてきました。幸いなことに、私の講座からは多数の教授・助教授を全国の大学に輩出でき、それぞれが新しい道を求めて形態を基盤とした研究を進展させていますことは、この度の退官に当たって最も誇らしいことの一つであります。幸いなことに、新潟大学には「硬組織」研究者が多く、講座担当直後から医学部整形外科の高橋名誉教授らとともに「新潟カルシウム代謝・硬組織研究会」を設立し、およそ25年間にわたり研究活動を続けて参りました。その後この研究会は、工学部、農学部、理学部、教育学部の先生方を含めた「新潟オステオサイエンスグループ」へと発展し、さらに日本歯科大学新潟歯学部、骨の研究所（高橋栄明所長）を加えて「新潟硬組織研究トライアングル」として研究交流を活性化し、我が国における「硬組織研究」の拠点として活動を展開しております。本年9月には、これらの研究グループが中心となり、第8回国際バイオミネラルイゼーションを胎内で開催することになっております。「個性輝く大学」を目指して、新潟大学も荒川学長の力強いリーダーシップの元で各分野、各部局とも積極的な活動や組織改革を行っておりますが、この硬組織研究グループもその一つであります。

私は平成5年から平成11年間で3期・6年間歯学部長を勤めさせて頂きました。大学設置基準の大綱化をはじめとする大学の変革期に突入した時期でもあり、平成5・6年度には教養部改組に伴う6年一環教育とカリキュラムの改訂、バブル崩壊に伴う旭町再開発計画の見直しと「新潟大学旭町キャンパスの再開発整備計画基本構想」に基づく新しいゾーニングの合意、大学院改革・重点化に伴う独立専攻系や大学院部局化の検討等が積極的に進められました。

平成7・8年度には全国歯学部にも先駆けて大学院に昼夜開講制を導入し、来るべき大学院重点化

に備えました。さらに平成9年度には、加齢歯科学講座の新設を概算要求し、幸いなことに教授定員増も含めて認められました。この概算識要求は、当時の武藤学長、羽田事務局長の絶大なご理解とご努力によるものであり、深く感謝申し上げます。

3期目の平成9・10年度は歯科医師受給問題で大きく揺れ動いた時期です。平成9年度早々に開催された国立大学歯学部長会議ならびに歯科大学長会議において文部省は、わが国における人口動態と歯科疾病構造の変化に対して歯科医師は過剰であり、総医療費抑制のためにも医師・歯科医師は削減せざるを得ない、という見解を明らかにしました。さらに文部省は、国立大学の改革の視点として、学部統廃合、「独立行政法人化」なども考慮した入学定員削減、学士編入学を含めた入試制度改革、カリキュラム改革、臨床教授制度の導入など、歯学教育の多様化、そして将来構想としてのデンタルスクール化、大学院の改組・充実、重点化・部局化などの大学院改革の必要性などを挙げて理解を求めました。現在、我が国の歯学部は着々とこれらの改革を進めつつあることは周知の事実であります。本学においても、部局長会議や評議員会などで、機会あるごとに歯学部の置かれた状況を説明させていただき、学長始め各部局長の先生方にはご理解と多大なご協力を頂きました。その中で歯学部の生き残りを賭けた道は、歯学部は率先して組織改革を行い、大学院を重点化することであることの共通理解も頂くことができました。

一方、平成10年10月に大学審議会からは「競争的環境の中で個性が輝く大学」との大学改革に関する答申が出されました。本学においては、各課題に対する5つのワーキンググループを設置し、その検討結果は「新潟大学の将来構想」として、平成11年1月に「学際的基幹大学としての新潟大学」―日本と地域の未来のために―『21世紀を生き抜く新潟大学』と題する報告書にまとめました。私は、荒川学長から、大学院に関する検討を付託され、新潟大学大学院の将来構想を大学院重点化の視点で纏めさせていただきました。しかし、医学・歯学においては、いわゆる重点化は国策として旧帝と東京医科歯科大学に止まり、旧六の多く

は複合大学院として部局化されることになりました。新潟大学も大学院医学研究科・歯学研究科は合併して部局化し、新潟大学医学歯学総合大学院として平成13年度からスタートすることになったわけでありませう。

3期6年にわたる学部長を私なりに全うできたのは、新潟大学全体のご理解とご協力、本学部教授会をはじめ学部構成員全てのご協力と共に、長嶋事務部長、丸山事務部長、安藤事務部長、小野江総務課長、相沢総務課長を始めとする事務部の絶大なる協力体制があればこそであります。

およそ40年間にわたって過ごしてきた国立大学生活に終止符を打つ時が迫ってきました。瞬く間の40年とも考えられますが、やはり長い道のりであった様な気も致します。その大半をお世話になった新潟大学での長い生活を通して、学生諸君、教官、事務官、同窓会の皆様など様々な人々との出会いの全てが私を幸せにしてくれました。退官に当たり改めて感謝申し上げます次第です。

最後に、今の心境を王昌齡の詩、「洛陽親友如相問 一片冰心在玉壺」に託し、退官の挨拶とさせていただきます。

退官おめでとうございます

歯学部長 花 田 晃 治

小澤英浩教授が、新潟大学歯学部の創設期から発展期を経て充実期を迎えるまでの永い期間にわたる献身的なご貢献に対して、新潟大学歯学部を代表して深甚なる謝意を申し上げます。

小澤教授は、新潟大学歯学部が創設間もない昭和42年5月に口腔解剖学第二講座助教授として赴任されました。小澤教授がそれまで教育、研究に携わってこられた、伝統ある東京医科歯科大学歯学部、弘前大学医学部、新潟大学医学部、東京医科歯科大学医学部などに比較すると想像を絶するような環境に、まず驚かれたことと思います。しかしながら、講義室もない、研究室もない、研究設備もない、という状況のなかで新しく歯学部を創っていかねばならない時期であったがゆえに、故小林茂夫教授は、若くして情熱と展望を持っておられた小澤教授に新潟大学歯学部への赴任を熱望されたものと思います。

アメリカ・バンダービルト大学医学部への留学を経て電子顕微鏡を用いた硬組織の微細構造学的研究を推進され、当時としては歯科医学界だけではなく広く生物学的分野においてまで注目される先進的な研究業績を携えて万人の認めるどころとして、昭和48年1月に口腔解剖学第一講座教授に

就任されました。

小澤教授のご研究については、我が国にとどまらず世界の硬組織微細形態学の先駆者であり、第一人者であることは、今ここで私が述べる必要はなく、すべての皆様が熟知しておられることです。小澤教授は教育の面においても極めてご熱心で一人一人の学生に対して暖かく接し、解剖学、組織学、微細構造学のすばらしさ、歯科医学に果たす役割の重要性、そして楽しさを教授し伝えてこられました。非常に多くの学生が小澤教授の研究室を訪れ教を請い、優秀な研究成果を学会等で発表した学生がいますように、それらを糧として研究者の道に進み歯科医学の進歩発展に寄与している者が多くいますし、また臨床の場にあつて常に教を基礎として患者さんの健康の維持・増進に貢献している者が全国にいます。今、教育の現場にあつては改革が叫ばれ、研究室配属実習とか、チュートリアル教育とか、少人数教育とかが提案され実行されています。こうした流れについても小澤教授は早くから実行してこられた先駆者であったと思っています。

小澤教授は、平成元年から新潟大学評議員を5期、平成5年から歯学部長および大学院歯学研究

科長を3期にわたり務められ、新潟大学、新潟大学歯学部および大学院歯学研究科の発展にご尽力されました。この間にあって全国に先駆けて社会人選抜大学院制度を確立され、全国にはじめての加齢歯科学講座を設立され、大学院重点化に向けても先進的に取り組まれ、新潟大学歯学部の発展に多大なご貢献をされました。こうして小澤教授が、日本海側唯一の国立大学歯学部の創設のために赴任され、その後の献身的なご努力によって築いてこられた基礎と伝統を基にして、先生のご意志を忠実に引き継ぎ、新潟大学歯学部が新潟にとどまらず日本の、世界の地域拠点となるように進歩、発展させることが私どもの任務であると感じています。

小澤教授が、昭和38年頃、東京医科歯科大学の、

湯島聖堂側の、私がいた今はなき古い研究室の隣の廊下で来る日も来る日も厚い古ガラスを割っておられるのを拝見したのが今思えば小澤教授との最初でした。それが電子顕微鏡に使うものであることがわかったのは、うかつにもだいぶ後のことでした。新潟大学においては助講会時代を含めて30年以上にわたり親しくおつきあいしていただき、多くのご指導、ご鞭撻をいただきましたことに心から感謝申し上げます。

うらやましいほどに、小澤教授は専門家はだしの絵画、写真の趣味をお持ちですが、それらに時間をおかけになるのはもう少し後にしていただき、日本の歯科医学、新潟大学歯学部のためにさらなるご尽力をお願い申し上げます。

ご健康をお祈り申し上げます。

小澤英浩教授のご退官に寄せて

北海道医療大学歯学部口腔解剖学第一講座 矢 嶋 俊 彦

小澤英浩先生におかれまして、この度ご定年退官を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。長い間、新潟大学歯学部口腔解剖学第一講座の教授として教育と研究に、さらに歯学部長といたしまして歯学部の充実発展に尽くされました。その多方面にわたるご功績に心より敬意を表しますとともに、格別の寂しさを感じております。

小澤先生に始めてお会いいたしましたのは、東大安田講堂が全共闘に占拠され、新潟大学でも大学紛争が激化していました1969年（昭和44年）春のことでした。小澤先生はこの紛争のために、アメリカから急遽お帰りになったばかりで、新進気鋭の助教授でありました。歯学部の創設間もない当時、歯学部校舎はなく、医学部付属病院病棟の間に肩身狭く建っていましたプレハブや医学部の古い研究棟に間借りしておりました。その当時学生であった皆さんが、新潟大学歯学部を始めとして全国の大学で教授・助教授として活躍されていることに大きな時代の流れを感じます。

われわれ門下生は、小澤先生の「教育と研究へ

の強い情熱と、豊かな発想」に魅了されました。先生の繊細でありながら、温厚篤実で人間味溢れ、学生を愛し、誠実で暖かく学生と接しておられるお人柄に引き付けられて教室に入り、ご指導を受けて参りました。そのため、教室はいつもたくさんの若い元気な声に溢れていました。小澤先生を中心に教育と研究に情熱を傾け、食べ、飲み、議論を戦わす豊かな日々を過ごすことができましたことは幸せでした。

小澤先生は、今日に至るまで「硬組織の組織細胞学的・組織細胞化学的研究」の最前線の研究を精力的に続けてこられ、多くの新知見を得られて、学会ごとに発表を続けてこられました。また、われわれ同門生を始めてといたしまして、多数の研究員の指導に多大な熱意を持って当たられてこられました。さらに、多くの優秀な歯科医師を、新潟大学歯学部卒業生として世に送り出してこられました。小澤教室に学んだ者は、歯科基礎医学分野では勿論、歯科臨床医学分野でもそれぞれ指導的役割を果たしております。これも先生の真摯で

かつ温厚で優しいお人柄のなせる業と申せます。また、幾つもの学会・学術集会を主催され、硬組織研究のリーダーとして国際的な活躍をされてこられました。その中で、われわれは人と人の結びつきの偉大さと素晴らしさを教えられ、その輪をさらに広げるべく努力することを学びました。小澤先生の下で、教育・研究の礎を創って頂き、

それが大いなる誇りと自信となっておりますことに改めて心から感謝申し上げます。有り難うございました。

先生は、ご退官後も新たな大学で教育・研究をご指導される予定であるとお聞きしております。今後とも、小澤先生の益々のご健勝とさらなるご研究のご発展をお祈り申し上げます。

「涙の最終講義」

歯学部3年 浦河裕美

「この時にあたり、非常に感慨深いものがあります。」と小澤先生が御講義の冒頭におっしゃられた時には、我慢していたはずでしたが、やはり胸がぐっとこみ上げてしまいたまりませんでした。

「私が生まれる前から教壇に立っていらっしゃる、その先生の最終御講義を、私が今こうして拝聴できる。私が今この場に臨むまでの間、小澤先生の御講義に感化され先生に魅了された方々は、一体どれほどの数になるのだろう。」と、愛しい人の死を悼むのと全く同類の哀悼の思い、を募らせたが、満杯の会場にいらした、どの方も、同じ思いだったことは間違いありません。

学部生の私は、学会で小澤先生が見事に発表なさる御様子を拝見したことがありません。けれども、プレゼンテーションのための機械が整っているとはいえない小さな講義室ながら、御自身が作成なさった切片写真のスライドなどを多用なさり、非常に明瞭に丁寧に御説明くださる小澤先生の御心構えは、学会で発表なさる時のそれと全く同じであったのではなからうか、と思います。

それほどに、小澤先生は、知識を吸収する時期に当たる我々学部生の知的好奇心に、真摯に向き合っていました。

事前に詳細に御準備なさった短冊のカードを、先生は御手元に、厚さ1 cmほどに積み上げて置かれ、一枚ずつそれをめぐりながら、黒板に色彩

豊かに、細胞小器官や組織など解剖学的構造を板書なさり、それについて丁寧に御説明なさいました。板書は、顕微鏡を片目に目に見えるものをスケッチした、その絵さながらでした。

色鉛筆を駆使して書き写した板書、先生がおっしゃる事柄を片っ端から必死にメモした内容、これらを盛り込んだノートは、自分の勉強には欠かせない財産です。

先生御自身が作成なさった切片写真のスライドを、毎週拝見でき、またこのスライドによって、石灰化の過程や骨形成や骨吸収を行う細胞を、勉強することができた幸せは、他所から羨まれてしまうかもしれません。

1年前、毎回講義が終わる度に「今日も本当に素晴らしい御講義だった。」と感激し、次回が楽しみでならなかった、小澤先生の御講義。

その時と同じ感動が、二月十五日、再び蘇りました。

けれども御講義終了後の心地よい余韻は、「次回を楽しみにすることはもうできないのだ。」という思いのうちに、涙を誘うものになりました。

そして改めて、小澤先生の我々学生への御熱意、御誠意、が有り難く、身に染みました。

小澤先生、素晴らしい御講義を教授くださり、本当に有り難うございました。

小澤英浩教授退官記念事業を終えて

口腔解剖学第一講座 江 尻 貞 一

小澤英浩教授は、平成13年3月31日付けをもちまして、停年退官されます。このたび先生の御退官をむかえるにあたり小澤教授同門会を母体とした退官記念事業実行委員会は、永年にわたる先生の御指導に感謝するとともに先生の御功績をたたえ記念誌の刊行、最終講義、退官記念講演会・祝賀会を退官記念事業として企画実施いたしました。なお、記念事業の実施にあたりまして、御協力と御援助を賜りました新潟大学歯学部関係者の皆様、新潟大学歯学部同窓会の皆様に深く感謝申し上げます。

簡単ではありますが、小澤英浩教授の最終講義と退官記念講演会・祝賀会の報告をさせていただきます。

小澤英浩教授の最終講義は、平成13年2月15日(木)午後4時より有壬記念館2階大会議室においておこなわれました。学生は講義担当学年である2年生を主体として3年生や4年生も出席いたしました。その他、大学院生、歯学部教官、医学部教官、農学部や理学部の先生方、日本歯科大学新潟歯学部など学外からの先生方をあわせて200名以上の参加者が集まり、通路や壁際に立ち見の人達があふれるような盛況の中、「骨代謝の形態科学」と題しました小澤英浩教授の最終講義が行われました。座長の新潟大学歯学部部長の花田晃治教授による懇切丁寧な小澤教授の紹介が行われた後、人の骨格が頭蓋骨に手を当てて考え込んでいるベサリウスの図から講義が始まり、生命の海としての骨の発生、歯科医療と骨疾患の関係を解説された後、骨の組織としての特徴と骨代謝における役割を形態学的に分かり易くかつ詳細に解説されました。項目としては、骨化様式の解説、骨の基質と石灰化過程の詳細、骨芽細胞と骨細胞そして破骨細胞に関する形態学的特徴と機能、骨吸収と骨形成のカップリング現象などを、様々な形態学的手法を用いて提示されるとともに Up Date の情報を分かり易くそして美しく解説されました。最後に、「Imagination is more important than knowledge in science.」という Einstein の言葉、「Important discovery in science and technology are serendipitous.」、「Beauty is truth, truth beauty.」

という Keats の言葉を学生に紹介され、「研究は楽しく面白いものです。そして教育も楽しい。特に学生諸君との付き合いが、研究生活40年間の情熱を生む原動力になった事を感謝しております。」との言葉で約2時間の最終講義を締めくくられました。講義終了後に、感謝の意を込めて、2年生、3年生、4年生の学生代表と教室から花束贈呈が行われ、また新潟大学歯学部同窓会を代表して会長の神田正一先生から記念品贈呈が行われました。その後、6時頃からは、有壬記念館一階のロビーにおきまして、懇親会が開催されました。お忙しい中、新潟大学関係者、同窓会関係者、他大学の先生方など多数御参集いただき楽しい会となりました。会を始めるにあたり、花田晃治歯学部部長、荒川正昭新潟大学学長、河野正司歯学部附属病院院長、神田正一歯学部同窓会長からお言葉を賜り、ついで熊木克治新潟大学医学部解剖学第一講座教授の御発声による乾杯で開宴となりました。しばらく歓談が続きましたが、小澤英浩教授が謝辞を述べられ、その後、同門会長の矢嶋俊彦北海道医療大学歯学部口腔解剖学第一講座教授による閉会の挨拶をもちまして懇親会が終了いたしました。

この場をお借りしまして、最終講義の座長の労をお取りいただきました花田晃治歯学部部長はじめ、最終講義・懇親会に御参集いただいた先生方、関係者の皆様および開催準備にあたって、御協力いただきました方々に、実行委員会を代表いたしまして心より御礼申し上げます。

小澤英浩教授退官記念講演会・祝賀会は3月17日(土)ホテル新潟において行われました。まず3階飛翔の間において午後1時から2時半までの間、東海大学医学部長・日本学術会議副会長の黒川清先生による「日本の大学：21世紀への課題と展望」と題した招待講演がありました。座長は荒川正昭新潟大学学長にお願いいたしました。講演内容は、明治以降現代にいたるまでの日本の歴史観をふまえた大学教育の変遷と問題点、日本の大学教育・研究の実状と諸外国の実状との比較、そして21世紀の日本の大学への提言という非

常にスケールの大きな格調高い講演でありました。その後、小澤英浩教授による記念講演「私の形態科学 四十年の歩み」が、座長の昭和大学名誉教授の須田立雄先生による小澤教授の紹介の後、約二時間おこなわれました。小澤先生は、昭和35年に弘前大学医学部助手に就任されて以来、昭和36年に新潟大学医学部助手、昭和38年に東京医科歯科大学医学部助手、昭和42年に新潟大学歯学部助教授、昭和48年に新潟大学歯学部口腔解剖学第一講座教授に就任され現在に至っていますが、40年にわたる研究内容をその職歴順に従って紹介されました。古い時代のスライドは非常に大きなサイズの国際版のスライドでしたので、大砲の様な特別なスライドプロジェクターを用いて映写し、35mmサイズ用のプロジェクター2台と合わせて、計3台のスライドプロジェクターを用いた講演でした。形態学者ならずとも、度肝を抜かれるような美しさと広範な研究内容、また新潟大学歯学部口腔解剖学第一講座を主催されてからの研究紹介では、研究を実践した人達の顔を全てスライドの中に複写して紹介され、小澤教授の研究に対する信念と研究指導者としてのお人柄が鮮明に表現されているような名講演でした。

講演終了後、記念写真撮影を行い、その後、午後6時より2階の芙蓉の間にて記念祝賀会を開催いたしました。年度末の大変お忙しい時期にもかかわらず、記念祝賀会には225名の方の御臨席を賜りました。会を始めるにあたり荒川正昭 新潟大学学長、花田晃治新潟大学歯学部長、山本正治新潟大学医学部長、恩師の水平敏知東京医科歯科大学名誉教授、中原泉日本歯科大学学長、江藤一洋東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科長、尾形悦郎癌研究会附属病院長より御祝辞を賜り、その後、小澤英浩教授による謝辞がございました。次に、高橋栄明新潟医療福祉大学学長による乾杯の御発声により祝宴が始まりました。しばらく歓談した後、

武藤輝一新潟国際情報大学学長、石岡靖新潟大学名誉教授、細田裕康東京医科歯科大学名誉教授・新潟大学名誉教授、斎藤毅日本歯科医学会会長、平野寛日本解剖学会理事長、乗松尋道日本骨代謝学会理事長、脇田稔歯科基礎医学会常任理事、黒川高秀昭和大学横浜市北部病院長、須田立雄昭和大学名誉教授、久米川正好明海大学歯学部教授、原耕二新潟大学名誉教授、梶川幸良新潟県歯科医師会副会長、松川公敏新潟市歯科医師会会長、神田正一新潟大学歯学部同窓会会長、前田健康新潟大学歯学部口腔解剖学第二講座教授から御祝いの言葉を賜りました。その後、小澤英浩教授同門会会長である矢嶋俊彦北海道医療大学歯学部解剖学第一講座教授より、小澤英浩教授へ川本喜八郎作の「諸葛亮孔明」の人形が記念品として贈呈されました。なお、この記念品を贈呈するにあたり、多くの新潟大学歯学部同窓生から御援助を賜りましたことを、この場をお借りし心から御礼申し上げます。次に壇上にいらっしゃる小澤英浩教授と御令室淑子様、同門会を代表して高野吉郎 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授、教室を代表して助手の池亀美華と秘書の高橋聡子、歯学部学生を代表して3年生の浦河裕美より花束贈呈が行われました。約2時間にわたる和やかな祝宴も終わりに近づき、河野正司新潟大学歯学部附属病院長による万歳三唱の後、退官記念事業実行委員会幹事である岩久文彦朝日大学歯学部口腔解剖学講座教授による閉会の辞をもちまして、小澤英浩教授退官記念祝賀会を閉会とさせていただきます。

最後になりましたが、退官記念祝賀会に御臨席賜りました方々、また記念事業の運営に多大なる御支援と御協力を賜りました新潟大学歯学部同窓会の皆様、ならびに退官事業実施に御協力を賜りました多くの関係者の皆様方に、実行委員会を代表して心より感謝し御礼申し上げます。

